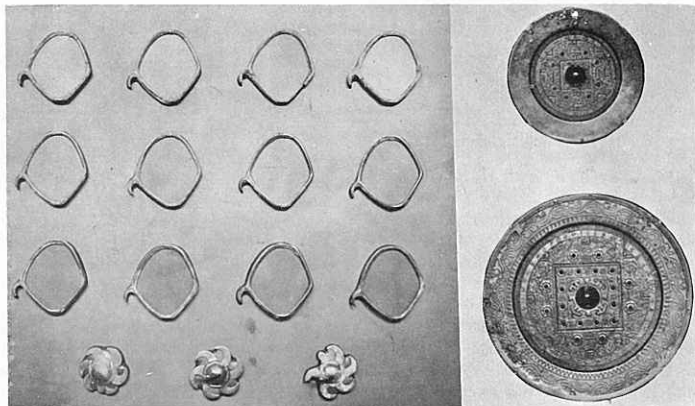


No. 2

## 博物館報



(重要文化財 肥前唐津櫻馬場出土品)

写真説明……昭和19年11月、弥生後期の装棺内から発見された一括遺物であって、「肥前唐津櫻馬場出土品」として重要文化財に指定されている。遺物は、方格四神鏡1面・方格渦文鏡1面・有鈎銅形銅製品26個・巴形銅器3個・ガラス小玉1個・鉄刀残片1個であって、単独の装棺遺物としては全国的に類例をみない学術的価値の高いものである。2面の鏡は、中国の漢で作られた舶載鏡であって、質が非常にすぐれている。有鈎銅形銅製品は、貝の腕輪を模して作られたものであり、巴形銅器は、桶の飾り金具ではないかと推定されている。ガラス小玉や鉄刀残片は、ガラスや鉄器がわが国に伝来した時期を知る上に重要な意義を有しているものである。

魏志倭人伝に、末盧国と記されている唐津湾周辺は、古来大陸との通交の門戸であったため、触角式銅剣をはじめとして大陸からもたらされた数多くの遺物が発見されている。この櫻馬場出土品もまた古代における唐津湾周辺の歴史的背景を知るにたる重要な文化的遺物の一つである。

## 目次

肥前唐津櫻馬場出土品……………	1
シルクロード展から……………	2
球状閃緑岩……………	3
切立遺跡の細石器……………	4
肥前国産物図考……………	5
近代洋画壇に活躍した人々(その2)……………	6
柿右衛門濁手彩絵花蝶八橋文壺……………	7
博物館日誌・お知らせ……………	8

## シルクロード展を 参観して

佐賀新聞社主催で、4月25日から5月9日までの15日間にわたって、シルクロード展が県立博物館で開催された。展示品は、昭和43年10月から9ヵ月間にわたって、中央アジア学術調査探検隊が収集し、将来したものの中から、350点余りが選ばれ、それを中心としたものであった。

このような純学術的な、内容的に質の高い展示会に対する県民の関心というものについて、不安をいっていたのであるが、主催者のなみなみならぬ努力により、予想以上の成果を挙げることができたことは、何よりもよるこばしいことであった。

展示品の内容は、ガンダーラの仏教美術。イラン高原の土器と陶器・メソポタミヤの出土品・イスラム教関係品・遊牧民の生活と民芸品・平原とオアシスの生活と民芸品・シルクロードの楽器などからなっていて、バラエティに富んでいた。調査団による将来品という制約のために、展示物は小物であって、一般の展示会に見られる目玉を欠いている反面、威圧感がなく極めて親しみやすいものであった。また、展示品に変化があり、写真や解説が理解をたすけ、参観者の興味をそそった。しかし、民芸品にはその年代の説明がなかったため、参観者は相当に時代感において混乱に陥ったのではないかと思われる。

シルクロード展の魅力は、古代における東西の文化が融合して形成された世界的文化、すなわち普遍的価値を有する文化遺産に接することであり、わが国の古代文化とくに古代文化の最高峰である天平文化の源流を知ることができることであり、延々数千キロメートルの砂漠や草原を通して選ばれた文化であるということであろう。シルクロードすなわち「絹の道」そして「文明の十字路」ということばには、夢幻的な魅力がたがよっており、その文化の中にひそむ秘められた歴史的な謎に対する限りない興味を禁ずることができないのである。

西バキスタンのペシャワールを中心とする地方を古くガンダーラと呼んでいた。印度に興った仏教は、このガンダーラに入って、ここから中央アジアや中国に伝わり、さらに日本へとひろまったのである。ここは東西文化の交流する「文明の十字路」で、最も著名なものが紀元前

後ごろから数世紀にわたって栄えたガンダーラの仏教美術である。

ガンダーラ仏教美術の中心となっている石造彫刻は、印度から入った仏教とギリシャ系の彫刻技術との融合によって発達したものであるといわれている。展示された仏像は、すべて堂塔の壁面や基壇の装飾に用いられたものであるため、浮彫の小像のみであるが、力量感にあふれた石像彫刻に接する時、その彫像技法のすばらしさに驚歎するとともに、わが国最初の飛鳥仏や白鳳仏にみられない明るさと親しみを感じられ、仏像彫刻の祖形に接することのできた喜びを禁ずることができない。

イラン高原出土の彩文黒色研磨土器・彩文土器・黒褐色土器・赤褐色土器など一連の土器は、すべて民芸品のなものであって、極めて身近な親しみのある土器であり、また、機能的にみても今日の私たちの日常容器に相通するものがある。三彩の陶器は、唐三彩や奈良三彩との関連において、特に興味深いものがあった。

遊牧民の生活の一面を知る織物類は、色彩の配合やシンメトリカルな文様等に、その厳しい風土と生活の調和とがしのびられ、わが国の織物との相違の一端がその生活環境とくに風土の違いに基づくものであることを感じさせられたのであった。

楽器類は、正合院宝物の楽器類との関連において特に興味深いものがあり、弦・打・管の楽器の三要素ともいべきものの粗朴な姿、世界人類のすべてに通ずる楽器のもつ魔力的な存在というものを深く考えさせられるのである。

(学芸課長 木下之治)



(シルクロード展風景)

## 資料紹介 1

## 球状閃緑岩

## ball diorite

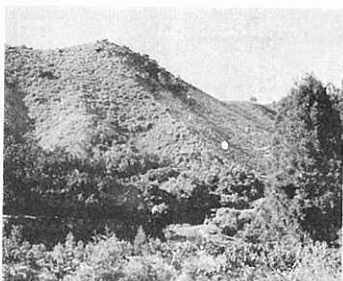
多久市北多久町相浦部落をとり、仏坊に通じる道がある。その途中に用水池があつてこのあたりに、大、小の球状閃緑岩が、かつてはみられ、あるものは耕地の石垣、あるものは地上に一部だけが露出して、散在していた。しかし、昭和38年頃から全国的におこつた「石ブーム」のため、小さいものは人力によって標本とか飾石に持ち去られ、大きいものは機械力を使って庭石用としてつぎつぎに運び去られた。昭和41年夏の調査で、母岩が発見されたので、学問的資料として保存するため、9月30日県天然記念物に仮指定され持ち出しを禁止した。

ナポレオン石；またはコルシカ石と俗称するが、本名を ball diorite という。

閃緑岩は、有色鉱物の大部分が角せん石、無色鉱物は斜長石であつて、黒雲母や石英はほとんど含まれていない。

球状をしている花こう岩、あるいは閃緑岩の成因についての研究は、まだよくなされていないが、一球状の断面は径5～10cmの偏球で、球相互の間は充填部(matrix)といい、閃緑岩でできている。球体をつくるのは既存の古生層を、岩漿(マグマ)が貫入する時、古生層の岩片を捕獲し、この岩片を捕獲岩(xenolith)と呼び、核として成長した。そしてその時、有色鉱物を無色鉱物と、何かの原因で周期的に晶出すること、同心球状の構造ができるものと思われる。

すべて岩漿(マグマ)は徐々に温度がさがつて分化するわけであるが、岩漿中の融点の高い、カンラン石・輝石・カルシウムに富む斜長石は早く晶出し、角せん石・黒雲母・ナトリウムに富む斜長石がその次に晶出し、更



(球状閃緑岩の産地)

に分化して正長石を晶出し、最後に石英が晶出する。

このように、温度が徐々に下がって最後まで分化がすすめば、石英・長石・雲母からなる酸性岩になるわけだが、閃緑岩はその分化の途中で中絶し、固まったものといえる。

球状閃緑岩内に晶出しているいくつかの層にある晶出鉱物は、岩漿中に起こつた、いろいろの化学変化の跡をとどめていると思われ、これを研究することは、地下の深いところにある岩漿(マグマ)の性質を明らかにする手がかりを得ることになるが、あまり研究されていない。

日本では、本県多久市北多久町のほかに、茨城県新治郡薮徳村峰寺山(380m)の中腹にある西光院の西南200mの地点、長野県伊那の毛無山、愛知県猿投山、瀬戸内の円上島などに産するのが知られているが、このほか、かつては産していたが、心ない人によってとりつくされたところや、まだ未発見地もあることであろう。

(学芸課 手塚静雄)



(球状閃緑岩)



## 資料紹介 2

## 切立遺跡の細石器

—東松浦郡鎮西町馬渡島所在—



切立遺跡は呼子港から海上10km、連絡船で約1時間の玄海灘に浮ぶ周囲12kmの馬渡島（マグラジマ）の中央部にあり、馬渡島最高峰の「番所の辻」の裾野、標高110mの比較的平坦な地点に遺跡は位置する。

馬渡島はキリシタンの島として知られており、鎌倉・南北朝時代にかけて松浦党の斑馬（マグラジマ）氏の根拠地で、文永・弘安の両役では大いに活躍している。また織豊の安土・桃山時代には波多氏の支配下に馬牧がはじまり、江戸時代末期まで続いていることが知られている。

発掘調査は昭和39年8月の4日間実施し、発掘調査地域は比較的平坦な地点を選び、南北に3m、東西に2m

のトレンチを設定し、調査は実施された。

層位は3層からなっており、第1層は黒色土層が30cm堆積しており、遺物は出土しない。第2層は茶褐色土層で小礫を含む粘土層であり、遺物のほとんどはこの第2層より出土する。しかし、この第2層でも石器の出土は上部層に多い現象を示す。第3層は藍色がかかった砂質を含む層で、出土遺物は確認できない。第3層の下が岩盤である。当調査地域は堆積土層が約70cmと比較的厚いが、遺物包含層すなわち文化層自体はたいへん浅く、遺物の層位的出土をとらえるためにはたいへん困難である。

出土遺物のほとんどは伊万里市「腰岳」を原産地とする良質の黒曜石と同質の原石を用いた石器であるものと推定され、その他サヌカイト製の石器が2～3点出土しているのみで、腰岳の黒曜石の分布圏であったものと思われる。

今回の発掘調査によって確認された石器は、ナイフ形石器（Knife-blades）・台形石器（Trapeze）・削器（Side scraper）・石核（Core）・刃器（Blade）等であり、剥片147点に対し第2次加工をほどこしたり、使用痕のある（石器）ものが69点出土しており、石器は全体の32%を占める。

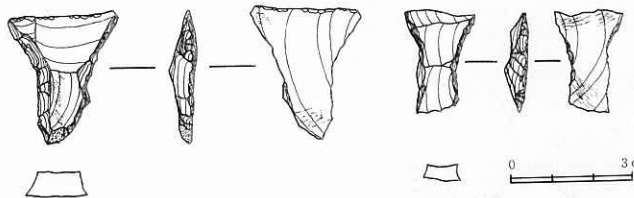
その他調査以前に挿入付刃器（Notch）・挿雑器（Hand drill）・尖頭器（point）等が採集されている。

各々の石器の中でも特異な形態をなす、刃部と基部がほぼ平行をなし、刃は直線で、左右両縁に細かい刃痕しの剥離が加えてある、台形石器が出土しており、長崎県南高来郡国見町百花台遺跡出土のものと同様である。

他に刃部をのぞき他のすべてに剥離が加えてある台形石器や伊万里市平沢良遺跡出土の台形石器に類似するものも出土している。

馬渡島、切立遺跡はナイフ形石器、台形石器を主に出土する遺跡で、先土器時代の終末期に属するものと思われる、わずか6mの発掘調査面積に対し遺物の出土量が著しいところから、今後の調査に関して各石器の層位的出土を確認する必要がある。

（学芸課 森 醇一朗）



（馬渡島切立遺跡出土の台形石器）

## 資料紹介③

## 肥前国産物図考 —その1—

本書は唐津出身の実業家、河村龍夫氏によって県に寄贈されたもので、縦26.7cm、横13.7cmの折本で8帖からなっている。表紙は雲龍模様紙の紙表紙で各帖に書名と帖数を記した題簽かはってある。内容は唐津領内の海、陸の主要特産物の生業を絵巻風に着色図示し随所に解説を付している。その概要は

1帖、「肥前国唐津領馬渡島馬牧併駒抽」と題し馬渡島の位置、地形の図説の後、放牧した馬を追い集め捕える情景を軽妙に描く。その間、馬についての解説があり、唐津大渡りでの牛馬市の風景が終りにある。



(布晒の図)

2帖、「肥前国唐津馬渡島鹿狩並鷹巢等記」と題し鹿狩りの実況や鷹の雛の生捕りの情景などがある。その間に鹿に関する色々な図説があり、鉄砲についての解説で終る。

3帖、「鵜飼の図」に始まり「諸鵜網の図」「生海鼠術の図」「長芋と図」「鮎魚梁の図」「松浦川蛭取図」など風情豊かな情景を描く。また「掛網の図」として松浦川での鯉の生捕りの様子が最後に描かれている。

4帖、小川島の捕鯨に関するもので全長12メートル余もあり、この絵図での圧巻である。鯨鯨図を書いた由来から記し、小川島周辺の地図、鯨の網取法の実況、解体、納屋、鯨の種類や利用法など図解し、最後に「羽指踊り」のいかにも楽しそうな情景を軽快に描く。

5帖、「布晒」と題し唐津村で木綿布をさらす場面、これに用いる用具を図解し、「鋳物師」では城下の大石村で鋳物用具とその工場内の状況を図説し、「線香製」と題して本町での線香の製造過程を描く。

6帖、江猪網、鮪網、鯛網について唐津湾での網漁の実況を描き、終りに「海士」についての説明とその情景

を巧みに描く。

7帖、「石炭」と「焼物大概」をかなり専門的な立場から図説している。石炭の由来、採掘法などの説明や横穴採掘、搬出、運搬などの情景を描き、焼物では唐津焼の起源から用具、形成までの様子、窯入れ情景など図説する。

8帖、「紙漉大概」と「紙漉諸道具大概」で楮の種類や紙漉の工程などの図説のあと、跋文にこの書が「…我が家の小童兒女に与えて玩とする外全く余儀なし…」とあり「天明四甲辰年秋七月、肥前唐津城南隠士、木崎牧軒入道盛標、行年七十三歳」とある。

牧川鷹之祐氏（元九大名誉教授）の研究によると著作者の正式の名は「木崎牧軒入道平盛標、字は子健」で宝暦12年（1762）三河国岡崎城から水野忠仕の家臣として共に来唐し、軍学の師として仕えていたことが判った。そしてこの種の図絵は安永2年（1774）に「獲鯨図説」（本巻の4帖にあたる）がまず作られそれから前後10数年の後に完成されたものといわれ、異本として完本8種端本10種あまりあるといわれている。

本書は其中、最も完備した「富士本」といわれるもので唐津藩領内の物産を知る資料としてのみならず、当時の博物学的、産業史的な角度からも注目に値するもので、民俗学的な立場からも今は絶えた色々な習俗、生産の諸用具、原料の処理、加工などの工程を学ぶうえからも貴重なものであり、あらゆる面から色々な資料を提起してくれるものである。そしてその描写も巧みで、ユーモアがあり軽快なタッチで見る人をいにしえのどかな生活の中へと誘いこむ妙味をもっている。

(学芸課 尾形善郎)



(鯛網の図)

## 資料紹介 4

## 近代洋画壇に活躍した人々 (その2)

— 久米 桂一郎 —

久米桂一郎が、黒田清輝とともにわが国近代洋画の確立に尽した双璧の一人であることは、広く知られている。

豪放な感じを与える黒田に較べて、いかにも久米が地味に思われるのは、彼の画風や画題、また作品数の少なきによるものであろうが、幾分彼の気質による所もあるように思われる。しかし、外光派を紹介し、わが国に洋画の正式な技術的移入とその指導を行った彼の業績は、十分輝いている。

久米は、慶応2年(1866)8月8日、佐賀市八幡小路に生れ、9歳の時上京している。

彼が洋画研究の志を立てたのは、明治14年に開かれた第2回勸業博覧会に出品されていた油絵を見てからとされている。

この時の出品者には、工部美術学校教師サン・ジョヴァレニ、その生徒の藤雅三、曾山幸彦らのほか、民間からは五姓田芳柳、養松、高橋由一らがあり、久米も彼らの作品に心動かされたものと思われる。この年はすでに、伝統美術の擁護を唱える国粹主義運動が盛んになっており、以後暫く洋画が野に下ることを思えば、洋画家久米にとって、この展覧会は幸運な機会だったといえよう。

久米自身の回顧談によれば、彼は明治14年頃、藤雅三について洋画研究を始め、彼の下で刷筆画の稽古を重ねたという。

その後19年7月、21歳で渡仏し、同じくパリに居た藤の紹介で黒田と知り、ともにラファエル・コランの門に入って26年帰朝するまで同門で学んでいる。

コランは、カパネルの門に学んだ、いわゆるフランス官学派の画家で、外光描写を取り入れた穏やかな折衷的画風を得意とした人であり、久米、黒田の後も岡田三郎助や和田英作らを迎え、彼らを通して明治後半期のわが国洋画界に大きな影響を与えている。

このコランの下での7年間に、久米は黒田との親交を深め、パリを基点にスペイン、ベルギー、スイス等を共に巡遊して絵画研究を重ねた。

この時期が、彼にとって最も精力的な修業の時代であり、また作品の数も多い時である。

この間の作品では、習作を除いて、人物画も数点見えるが、風景画の方が点数は多い。

挿絵の「フランス風景」もこの時代の作品であり、初期の人物画に見られる硬い筆線が和らげられ、外光描写



(フランス風景 1891年油彩 41.0×31.5cm)

を取り入れたコラン風の柔らかな筆触と甘美な情感を添えた秀作といえよう。

26年帰朝後は、まず黒田とともに22年創立の明治美術会に籍を置き、27・8年の同会の展覧会に瀟灑作品等を出品する一方、27年には、山本芳翠の画塾生巧館を譲り受け、天真道場を開いた。

翌28年、京都での第4回国勸業博覧会には、「清水秋景図」を出品し妙技二等賞を受けている。29年、東京美術学校に西洋画科が設けられると、ここで解剖学と考古学の指導を任せられることになった。またこの年、明治美術会の官僚風を嫌い、同会を脱会して、前年から計画のあった白馬会創設を黒田らと実現、その第1回展を開いている。白馬会系は、以後新派、派派と呼ばれ、明治美術会系の旧派、脂派と明確に区分されるとともに、フランス自由主義の思潮を背景に優れた新人を育てるうちに、次第に洋画壇の主流を形成していくわけである。

この間の久米の活躍は容易に想像できるが、31年、東京美術学校の教授に任じられる頃あたりが、画家としての久米の活躍の頂点を示すものと考えられる。

その後は、作品数も少なく、むしろ教育者あるいは美術行政者としての久米が前面に浮び上ってき、学校での講義の他、数々の博覧会、展覧会の準備、審査等、彼の公務は多忙をきわめるものであったと思われる。

そのため彼自身の創作活動に制限が加えられたのは事実であろう。

しかし、かつて旧派に対して新しい表現法を誇示した久米らの画風も、やがて文展から二科会結成へと移って行く洋画界の流れの前では、もはやアカデミズムの名で代称される時がきていたのである。

そのような時流に対して、画家久米は、頑ななまでに自己を守ったかのように見える。それは彼の画技の限界を示していたのかも知れないが、存外彼の気質によるものであったかも知れないように思える。

昭和9年7月27日没。

(学芸課 三輪英夫)

## 資料紹介⑤

## 柿右衛門について

## 柿右衛門濁手彩絵花蝶八橋文壺

日本赤絵の創始者として知られている柿右衛門の赤絵付完成後、その技法は有田近傍はもとより全国に伝わっていった。

このため有田は、日本磁器の一大産地として、近世日本の工芸文化の中に花開き、その製品は、遠く東南アジア、西欧にまで輸出されていった。

有田磁器発展の舞台を考えてみる時、まず第一は、元和2年(1616)鮮人陶工の一人によって、有田泉山の陶石が発見されたことである。次に丁度その頃、初代柿右衛門は有田南河原に移住して、京の陶工、高原五郎七の指導をうけて白磁染付の焼成法を習得していた。次には1643年頃、伊万里の陶商、東島徳左衛門が、長崎にいた中国人から色絵付の釉薬を購入して柿右衛門に伝えた。これでその条件はそろったわけであるが、それに加えて、肥前陶業に対する佐賀宗藩による保護、統制の発展策は有田の磁器生産をますます助長させていった。しかし赤絵のはじめは、発色は鈍く、色調もさななかつたため、もっぱら素地の精製に苦心し、ついに濁手素地をつくり



(柿右衛門濁手彩絵花蝶八橋文壺  
口径11cm、胴径16.5cm、高22cm)

あげるにいたった。このため器物の種類は少なく、壺や皿類に限られ、もっぱら製品の安定と赤絵の研究に意を注いだといわれている。

柿右衛門の時代区分は、現在、初期(初代～4代、1620～1680)、中期(5代～7代、1681～1880)、後期(8代～10代、1770～1860)の三期に分けて考えられている。

絵文様は、中国絵模様様の日本の様式化と、純日本的な大和絵風なもの、オランダ好みのものに分類される。

色絵に使われている色の種類は、赤、黄、緑、黒、紫金、銀と豊富である。これらを濁手素地と染付素地の場合によって、それぞれの色調が整えられ、磁肌の地味を配色の効果によって生かしている。

濁手の焼成はむづかしく、胎土の土合せ、選別吟味が充分行われ、釉薬の配合、濃度、施釉作業の熟達によらなければ濁手の優品は得られない。濁手の場合の色あいは、一体に淡い色調で、磁肌の品位とよく調和している。

柿右衛門の窯では、本焼後、大体の輪廓を黒の線描で表わし、その上を濃淡の上絵で色調をととのえており、器の形状とよく調和している。配色は多彩ではあるが、磁肌を充分残し、色彩の調和美によってよく全体のまとまりをみせ、独特な風格をそなえている。

この表現意図が、柿右衛門の伝統美といえよう。

ここにかかっている写真の濁手壺は、ご覧のとおり、11cmの口径の首は心持ち下にしぼられ肩にきて、自然な張り力がこもり、胴径16.5cmとなり、次第に優雅な線のしぼりによって、底部に達する寸前、わずかに外にひろがり底部で終っており、無理のない美しい形になっている。

磁肌は濁手独特の柔かい光沢をもち絵文様は、表、裏とも互根の廻りに菊花が咲きこぼれ、蝶が舞い、八橋が黄色で表現されている。

これらの絵文様の上下には雲形文が大きく、また小さく配され、八橋の黄と調和して実に色鮮やかである。

色彩は、黄、群青が主で、そのほか緑と朱が彩色され、釉薬はいずれも地肌が見えるほど、うすく透明である。

絵の上部、首の部分は黒線で地文を描き、鮮やかな群青でぬられ、肩は黄、群青、緑の色調によって下部の絵との調和をはかっている。また絵の下部は朱線でくざられ、下部6cm位は、白の磁肌をそのまま残し、下部のくびれの部分に2本の朱線を引き全体の構図を安定させている。

この濁手の壺は、磁肌、上絵の配色、調和、発色とも、よく柿右衛門の特色を表わしており、初期の最も技術の安定した時代のものと思われる優品である。

(学芸課 久保儀市)

## 博物館日誌

- 4月5日 日本建築学会から審査員6名、45年度の建築学会作品賞候補として本館を視察
- 4月6日 東京国立博物館施設課長外1名本館の取蔵庫調査
- 4月18日 九州芸術工科大学学長小池新二氏来館
- 4月19日 米国フリーア美術館長ホープ氏来館
- 4月21日 沖縄中城区教育委員会委員長呉屋尚紀氏ほか来館
- 4月25日 シルクロード展開場
- 4月27日 オーストリア特命全権大使藤山橋一氏夫妻来館
- 5月2日 熊本市立博物館長上村健一氏ほか来館

- 5月6日 足立美術館長門脇顕正氏来館  
高知県立郷土文化館業務課長森岡敦夫氏来館
- 5月13日 本館の建物について45年度日本建築学会作品賞を受賞する旨の連絡をうける。
- 5月18日 煙蒸室検査
- 5月18日 東京国立博物館資料課長  
江口正一氏来館
- 5月20日 野島展開場

## お知らせ

### ①6、7月の行事予定

#### 常設展示

#### ○佐賀県の歴史と文化展

これは佐賀県の地質時代から現在の地形ができあがるまでの経過を示す資料や、考古、歴史美術工芸資料などを展示して本県の歴史と文化の特質を明らかにするように展示しています。

#### ○坂の下縄文遺跡展

7月20日から8月31日まで

西有田町の坂の下における今から約4千年前の縄文時代の食糧貯蔵穴群址から出土した遺物を通じて当時の生活の一断面を知ることができるよう展示します。

#### 研究講座

期日(予定) 6月19日(土)午後1時半から

研究課題 佐賀県の弥生文化について

講師 学芸課長 木下之治

※研究講座は本館収蔵資料研究を中心に開催します。

### ②博物館の利用案内

開館時間 午前9時から午後4時30分まで

休館日 毎週月曜日

年末年始12月28日～1月4日

国民の祝日の翌日

観覧料 成人の日、こどもの日、文化の日は無料(ただし特別展の開館時は除く)

(単位 円)

#### 常設展

区分	大人	大高生	中小生
個人	50	30	20
団体	30	20	10

(団体は20名以上で特別展の観覧料は別に定めます)

#### 博物館報 第2号

発行年月日 昭和46年6月1日

編集 古賀秀男

発行 佐賀市内一丁目15～23  
佐賀県立博物館

印刷 佐賀印刷社